

8月5日…警視庁爆撃後の国立新美術館は、普段とはまるで別の建物のようにだった。巨大なガラスカーテンウォールの向こうに、濡れた東京の光が滲んでいる。雨がゆっくりと流れ落ち、その軌跡が街を歪ませていた。

館内は必要最低限の照明だけが残されている。

展示室の一角を照らすスポットライトが、白い壁と床に柔らかな陰影を落とし、空間の広さをかえって強調しており、人の気配はない。

あるのは、空調の低い唸りと、どこか遠くで鳴る排水の音だけだった。

その中を、二人分の足音がゆっくりと響く。

床は磨き上げられていて、靴底が触れるたびに、乾いた反響が遅れて追いかけてくる。

烏藤 すみれは、展示室の中央で足を止めた。

視線の先には、様々なを覆う巨大な抽象画。

色彩は抑えられているが、無数の線と面が重なり合い、どこか落ち着かない圧迫感を与えている。意味は読み取れないが、何かを強く主張しているようにも見えた。

すみれは、しばらくそれを見つめてから口を開いた。

「…こちらでお話ということですか」

声は静かだったが、この空間では必要以上に広がる。

「ええ、丁度先日の爆撃を受けて臨時休館でしたので密会には丁度良いかと。」

彼女は作品に目を向けたまま、脚を進める。

「こういう場所の方が、都合がいいと思ひまして。」

すみれは振り返らずに問い返す。

「えっと…都合とは？」

安所は、少しだけ首を傾けた。

「意味がはっきりしないものが並んでいますから。」

指先で、作品の一部をなぞるような仕草をする。

「こういうものを前にすると、人は自然に考え始めるんです。」

これは何を表しているのか…と。ですが、最近は少し違います」

ゆっくりと、すみれの方へ視線を向ける。

「自分で意味を考えるよりも、誰かに与えられた意味を受け取る方が楽だと感じる人は多い。」

すみれはそれに対して何も返さない。ただ、わずかに視線を動かただけだった。

安所は視線を外し、歩き出し、足音がまた空間を満たす。

「…本題に入りましょうか。」

「えっと…お願いします。」



安所はタブレットを取り出し、画面を点灯させた。暗い空間の中で、白い光が顔を照らす。

「まず、あなた方のパートナーデジモンですが、所在が特定できました。」

すみれの視線が、ほんのわずかに鋭くなる。いつものように感情を露わにしなかったのは、安所に対しての不信感からであった。

「…どちらに。」

「新宿区の宗教施設、The Elect of Zion(ジ・エレクト・オブ・ザイオン)の東京支部です。」

さらりと告げられたその言葉は、妙に現実感があった。

すみれはゆっくりと振り返る。

「待ってください…なぜ、警察組織がああ規模の団体と…というか確かあそこは公安の監視対象では…」

安所は肩をすくめるようにして、軽く頷いた。「警察上層部がどこまで把握してるかは分かりませんが、昔から、教団と天使型デジモンの繋がりがあつた事は、我々の間では芸能界のアレやコレや並みに確信はない暗黙の事実として認知されてましたが…それが今回で確信に変わったという事ですね。」

更に面白い事に、厚生省との繋がりも分かりました…おっとそれは後ほど。」

ガラスの向こうの雨雲に一瞬だけ目をやる。

「人の出入りが多く、活動はすべて合法的に見える。」

公安の監視対象ですが、人間とデジモン案件では縦割りで情報が断絶され分散され、一般的な外部の目とも隔絶されている。

絶好の場所ではありませんね。

まあ…新宿のど真ん中という点に目を瞑ればですが。」

すみれは数秒、何も言わなかった。

空調の音が、やけに大きく聞こえる。

「…シンドゥーラモン達は、無事なのでしょうか」

安所は少しだけ考える素振りを見せた。

「報告によれば活動は維持されていますが、取えて言うならば、自律的な状態ではありません。」

空中に浮かんだ画面が切り替わり、簡易的な構造図が浮かび上がる。

「建設当時は結構騒がれましたからね、全容等はご存じかと思われます。」

「タワマン並みのビルと広い敷地にある大規模な礼拝施設に何よりビルの最上階の花のような 奇妙なモニュメント。」

…資金元の献金内容での法律的な違法性もなく、囲い込み等もない本人意思に基づいたもので、奇異な事にあくまで本人の資産の注入のみで親族間のトラブルになる資金の注入がないとか…そっちの方にすぐ話題がシフトしましたよね。」

「メディア、SNS、事件系のデジチューバーが挙って取り上げましたからね、アレは教団のいい宣伝になったでしょう。」

ひとつ訂正するなら親族間の資金注入は確かにありませんが、親族が全員信者になっての全財産の資金注入はありましたね。

いやはや、あのインタビューの親族全員の笑顔、中々インパクトがありました。」

「…。」

「さて施設は、ビル型の縦の施設と礼拝堂等の横の施設で幾つかのセクションに分かれています。」

ビルの全長は、180mの40階層このビルエリアが信者達の移住区域です。

最上層は限られた教団関係者にしかアクセスできません。

恐らくセラフィモン、もしくはそれに準ずる者がいます。

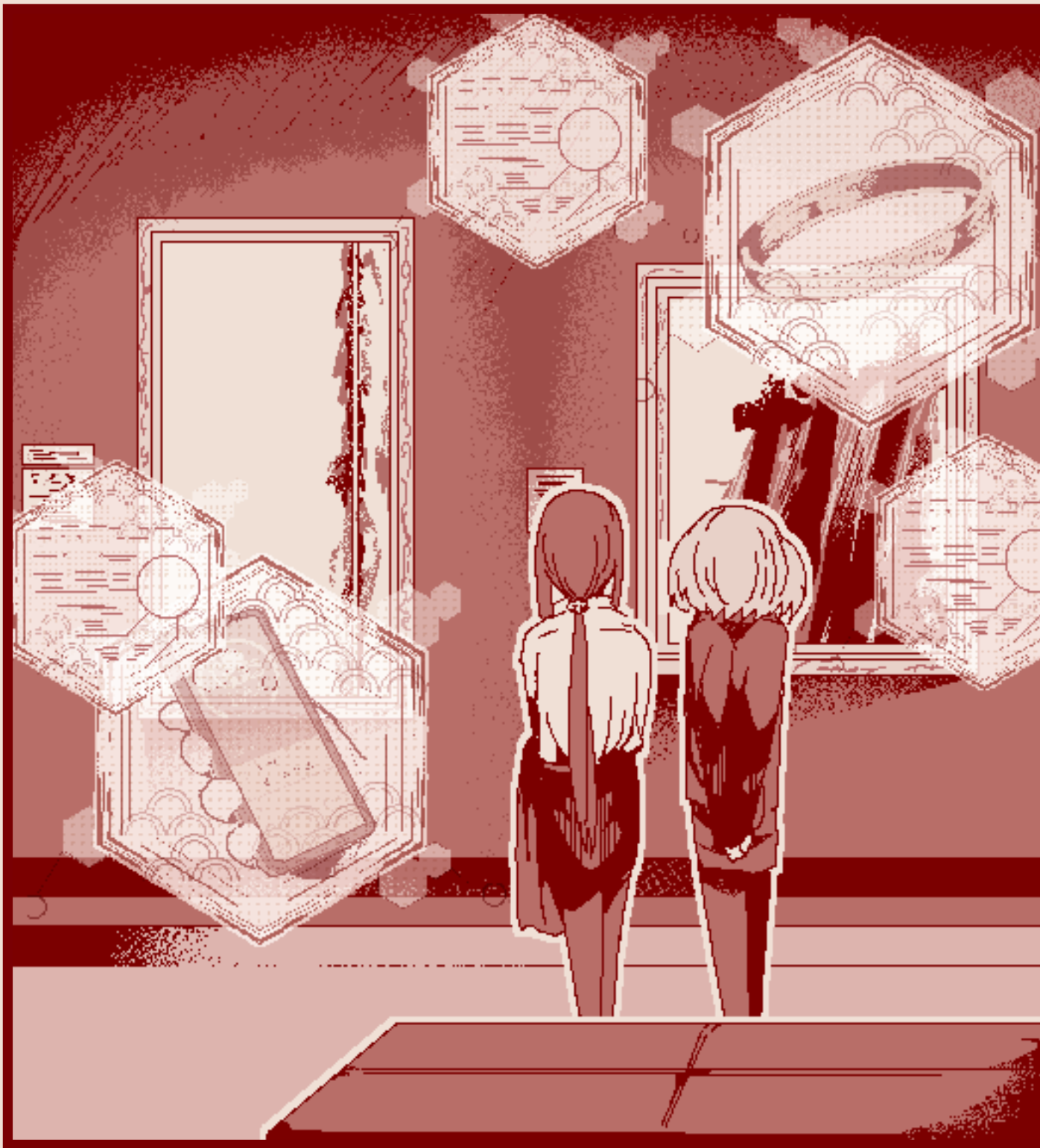
基本的に礼拝施設は、ビルディング内ではなく、横側に展開されています。

そして…。」

画面が最下層で止まる。

「そしてここが、公開資料にはありませんが、デジモンの収容・管理区画となっています。」

「ここに…。」



「次に、厚生省との繋がりについて説明しましょう。」

「…。」

「厚生省が配布されている、現在日本での利用率が80%に近い健康維持及びメンタルケアアプリ【サポタマ】ですが、アレには天使達から提供された未知のプログラムが使用されています。」

ある程度の心理状況の分析及び不安傾向からくるアプリ依存をトリガーとして、コンセクレイションリングを使用者に発生させます。」

(コンセクレイションリング…勇太君から聞いた天使達がデジモンを洗脳するために使っていたリング。)

…というか、そんな情報まで自衛隊は掴んでいたのね…。)

すみれの視線に気付き、安所はわざとらしく人差し指を口に当てて笑ってみせた。(…本当に人を喰ったような…。)

「コンセクレイションリングが発生した者の状態は、一般に言われる洗脳とは、少し性質が異なります。」

「敢えて言うなら制御といいましょうか。」

画面には膨大なログデータが流れている。

数値、グラフ、時系列…それらが整然と並び、無機質な美しさすら感じさせた。

「厚生省のアプリは、健康管理ツールとして普及していますが、実際には、個人の行動履歴、感情の変動、意思決定の傾向を継続的に収集しています。」

心理学的には、認知バイアスや意思決定のヒューリスティックの解析に近いですね」

すみれは画面を見つめたまま、静かに言う。

「それが…制御に繋がるのですか」

「はい。」

安所は頷く。

「継続利用によって、自己参照モデルが形成されます。」

「…自己参照？」

「自分とはこういう人間である。という内的な認識です。」

そこには、一人の人物が祈る様子が映っていた。

表情は穏やかで、安定している。だがどこか、均一すぎる。

「…ちょっと待ってください。この人物って。」

「ええ、昨年、教団に対して訴訟を起こそうとした弁護士を惨殺した受刑者の拘置所での様子です。」

覚えていますか、教団がカルトと言われ、再来と言われるようになった原因の事件です。

この状態になると、外部からの提示が、自分の意思として受け入れられるようになります。

それは、強制ではありません、本人は納得しています。

教団関係者の証言、資料等から一切の弁護士の殺害を仄めかすものは出ませんでした。

ですからこれは、その信者が考え教団利益となる行動を取った。

洗脳というより、集団としての行動最適化です。

まあ、最適化しても考えるのが、当人の能力等ではこうもお粗末な結果となるのでしょうか。」

その言葉は、妙に滑らかに空間に溶けた。

長い沈黙が落ちる。

展示室の奥で、何かが軋むような音がした気がしたが、すぐに消えた。



「烏藤警部補」

安所が静かに呼びかける。

「この国の心理的傾向について、どの程度ご存じですか」

「えっと…？」

安所は小さく笑う。

「現在の日本社会では、いくつかの傾向が指摘されています。

1: 長期的な経済停滞に伴う慢性的ストレス。

2: 社会的比較の常態化。

3: 関係性の希薄化による孤立。

そして、自己責任意識の内面化…これらは個別の問題ではありません、相互に関連し、循環しています。すみれは静かに聞いている。

「社会心理学では、相対的剥奪や外部評価依存として説明されます臨床的には、軽度の抑うつや不安が広く分布する状態…いわゆるサブクリニカル層の拡大です。」

安所は視線を上げ、展示空間全体を見渡した。

「重要なのは、これが例外ではなく、標準に近づいている点です。

天使型デジモンは、これを理解しています。

ただし、彼らは何も新しく作っていません

既に存在していたものを並べ替えただけです。

不安はそのまま

孤立もそのまま

競争もそのまま

ただ、使える形に整えた。」

安所は一步だけ近づく。

「事件も同じです」

「ゼロから起こしているわけではなく、既にある兆候を、増幅させ、わずかな不安を広げ、小さな対立を決定的にする。

曖昧な絶望…そして怒りに輪郭を与える

その上で敵と救済を提示する。

自身の漠然としたそれらの不安に、逃げ場…答えを与え一つに収束させることで、思考を停止させ依存を成立させる。

先の事件も教団というコミュニティ依存と1と100、味方か敵か、正義と悪の物事の多面的な側面を排除し、安易な二元論にしてしまう。

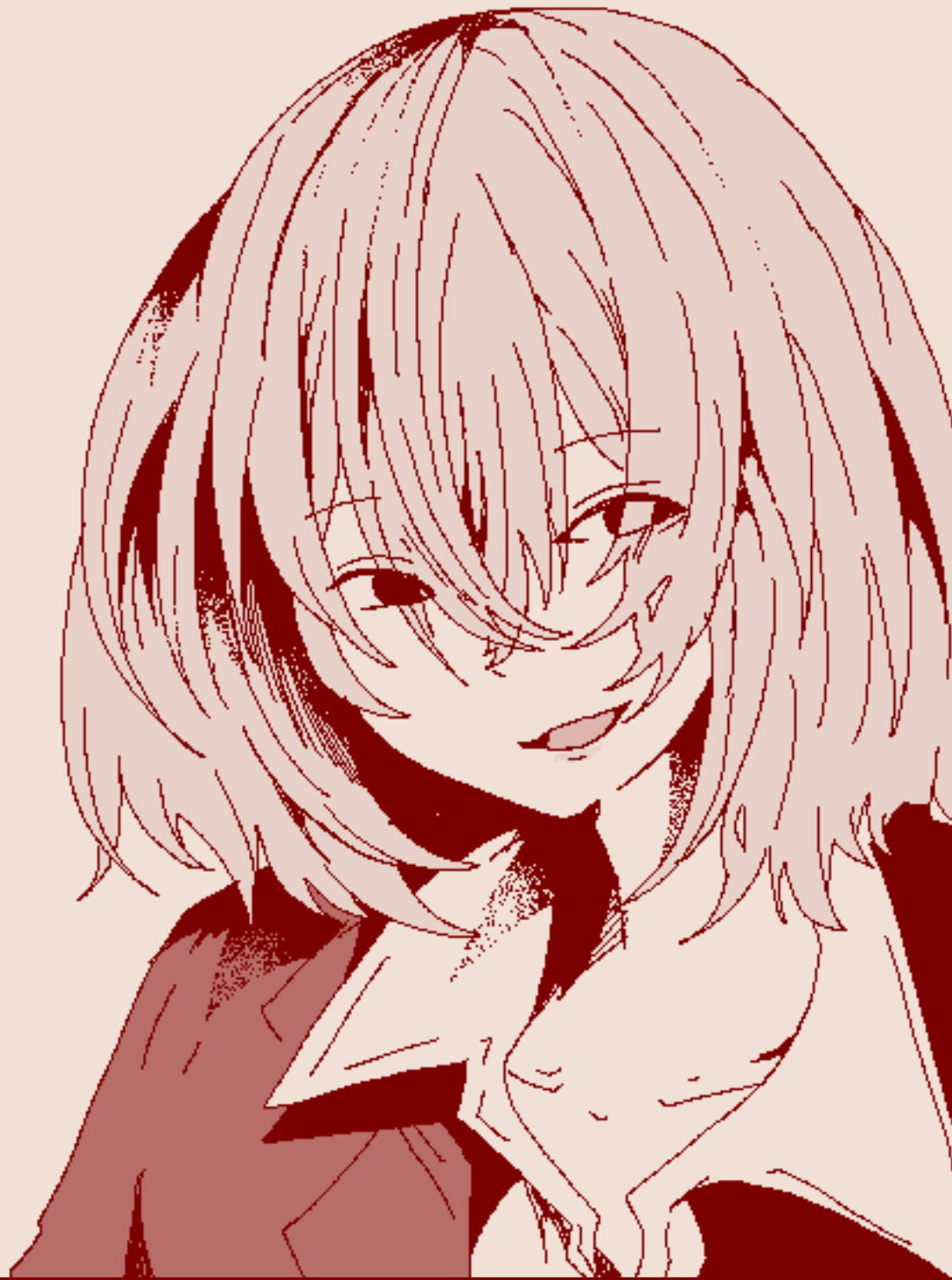
ある意味ではカルトがカルトである由縁ですね。

ただし、この教団と他のカルトの差異は出力の仕方になるのですかね。

他のカルトが前述の個人の不安を個人の尊厳の為に行動を起こす…ある意味情熱のようなエゴイズムがありますが、この教団にはそれが無い。

出力する頃には個人の感情もなく、アルトゥルイズムによる行動と変わっている。

利他的と聞こえはいいですけど、教団という括りの中での話でより広い社会から見れば十分にエゴイストですがね。」



「…そんなの。」

「それでも、信者は救われています。」

ただし、その指標は従順さと安定性を区別していません。

極めて安定した個体は外部から見れば理想的ですが、人の抱えている混沌とした不確定要素となるカオスが存在していません。

逸脱しない。

反抗しない。

自律的に従う。

理想的な市民…いえ…敢えて強い言葉を使うのであれば、家畜でしょうかね？」

その言葉は、静かに落ちた。

「なんのために…。」

「そこまでは、我々には分かりません。」

ただし、先日の爆撃、自衛隊と警察の出動による緊迫状態。

全国で急激に増え始めた怪事件…いえ、敢えて言うのなら何者かが手引きしたデジモン事件でしょうかね。

今、この国は今までにない不安定な社会になっています。

先の烏藤警部補の活躍…DWでのデーモンの一派との交戦…あれもデザイアリングと呼ばれるものの社会秩序の混乱から天使達の支配に移行しました。

一時的な不安やストレス傾向は基本的に数日程である程度減少します。

現在の緊迫状態もメディアの報道頻度も減ってきて、社会運営も一般的なサイクルに戻ってきています。

ただし、ここでより大きな火種が起これば、それはこの緊迫状態を燃料としてどれ程の炎を起こすのでしょうかね？」

すみれは顔を上げる。

「…何が起きるのですか？」

安所がすみれに振り返り、不敵に告げる。

「段階が移行しするのではないかと考えて居ます。」

利用率が80%近いデジタマも現時点でもコンセクレイションリングの発生率は我々が確認する限り【そこまで】と言っていいでしょう。

この発生率は、ある意味この国の功罪と言えるでしょうね。

ですが、自発的な従属が成立しなくなると次は、強制的な安定化です。」

静かに言い切る。

「制圧へ。」

安所が言う。

「教団に向かうのであれば、急いでください。」

足音だけが、広い展示室に長く響いていた。



「それで、どうするんだい？すみれちゃん？」

「うお!?宗介さん急に顔出さないでくださいよ!？」

ただでさえ無人の美術館って怖いのに警察に通報する所でしたよ!？」

「警察だけお…？」

「勿論、行くのでしょうか？調査権限もありませんがここで引く訳には行きませんしね。」

「紋十郎てめえ…俺がいい感じに言おうとした台詞を～。」

「心の広さと頭髪の多さって比例してるのかしらね？」

気付けば背後から電操課の面々がいた。

「ふふ…もちろん皆さんの分の潜入用装備はこちらで用意させていただいていますよ。」

しかし、毎度聞き耳立ててますが警官としてどうなのでしょうかね？」

「起訴猶予（多めに見てください。）」

「ところでもうひとつ頼まれていた日野 勇太君、鬼塚 光さんの保護についてですが…。」

「すみません…こちら情報も遮断されています。」

「結論からいいますと、鬼塚 光さんは報道の通り未だに見つかっていません。」

恐らくDWでしょうね。

日野 勇太君は周辺捜査で先日、自宅に天使型、教団関係者と思われる者が尋ねて家族を連れて行ったという証言が得られました。

本人も新宿で同時刻に目撃証言が得られましたが、それから行方が使えていません。」

「…。」

「保護、協力…どちらにしても望めなそうですね。」

新型のコンセクレイションリングは、デジモンには効果が薄いですが、逆に人間でしたらアプリを挟まず一気に手中に収められるそうですからね。」

「…初耳なのですが。」

安所はニコリと笑いかけた。

「彼自身がタイマーの中には、珍しいスピリットタイプのタイマー…次、会ったのなら敵対を前提で考えおかないと幾らお渡しする装備でも片手間であしらせるものではないはずですよ？」

「…。」

「烏藤警部補…あなたの優しさは理解しますが、なすべきことを見誤らない事を願います。」



安所から渡されたものは、谷間まで開いたピッチリ系のライダースーツであった。

「あの…これで合ってます？」

「ええ新型の隠密型のスーツです。」

服内がAI制御のパワードスーツになってますのである程度のデジモンにも対応できます。

右耳のは機器のハックも可能ですし、コンタクトレンズを通じたAR操作で視覚的な操作も可能ですよ。」

「…確かに全然足音もしません…それに匂いも、狩りに使えますねこれ。」

「ふふ、おじさん達の臭いもこれで遮断できるって訳だね。」

「…それよりなんで胸元空いてるんですか？女性面子だけで見るならまだしも…いや、明智さんが緊張して殺人鬼みたいな目になってますよ？」

なによりおっさんの胸毛が全開になってるじゃないですか？」

「…排熱のためですよ？」



「ふふ…ある意味アンダーヘア並みに隠したいものだね。
公然猥褻で現行犯逮捕できそうじゃないか、子供達の為にもここで捕まえるべきかしら？
…というか殺したいね。」

「…。」

「丁さんが言うと洒落にならないのでやめて欲しいですね。」

「…デジマル、スーツを噛んではいけない。」

「ふふっちょっと面白そうだからと思ってジッパー締まらないようにしましたが失敗でしたね。」

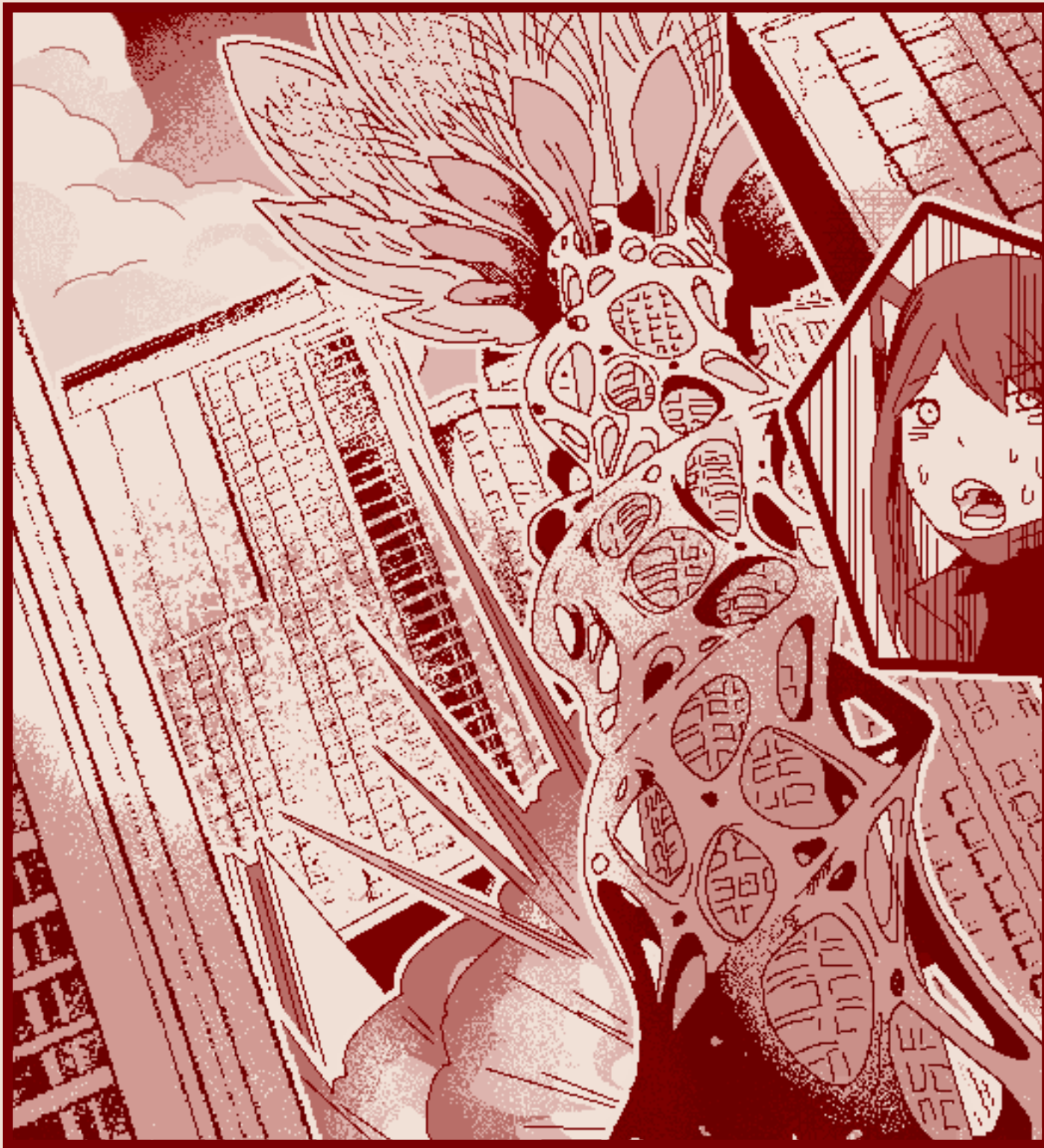
思ったよりキツ…目立ってしまいそうだ。

とにもかくにも隠密作戦です。

これ以上社会に混乱を招くような事にならないようにお願いしますね。」

「…とにもかくにも皆さん行きましょう！」

「「おう！」」



すみれ達が突入するその瞬間であった。

教団が爆破されていた。

その時のニュースでは、謎の白つなぎの集団が教団で揉めてるかと思ったら、無人の礼拝堂が爆破されたということであった。

「これ、私達のせいじゃないですよね!!!!!!????」